（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　高桑枝実子（たかくわえみこ）

本論文は、『万葉集』の挽歌の流れを丹念に辿り、そこから挽歌の本質がどこにあるかを考究したものである。全体は、序章、終章を含む五章十三節からなる。

第一章「万葉人の挽歌観」は、有間皇子自傷歌群を取り上げる。自傷歌二首の後に追悼歌が配列されるありかたが、巻二編者の挽歌観を示しており、それは巻二挽歌が同じ構造をもつ柿本人麻呂自傷歌群によって閉じられていたこととも呼応するとする。「柩を挽く際に歌われる歌」という中国の挽歌の原意からは離れて、死者が生じた際に新たに作り出された一回性のある歌が、巻二編者の認識する挽歌であったとする。さらに山上憶良「日本挽歌」を取り上げ、その表現の前提に、記紀・風土記の「石根・木立の言問ふ世界」があったことを指摘して、従来解釈に問題があった「石木をも　問ひ放け知らず」の理解に一石を投じている。これらは新見の提示であり、本論文の成果として高く評価しうる。

第二章「万葉挽歌表現の考察」は、柿本人麻呂「日並皇子挽歌」「高市皇子挽歌」「吉備津采女挽歌」などを考察する。とりわけ注目すべきは、天智天皇挽歌群の「姓氏未詳婦人作歌」の論で、結句の「夢に見えつる」の表現に着目、天智の「夢」が婦人にとって意想外にもたらされたものであることを指摘する。「夢」に現れた天智の意志が何であったのかを探ろうとする歌い手の意識が、天智の鎮魂につながるとする。充分な説得性をもつ論といえる。詠作主体「われ」が、「天の下　四方の人」と重なると説く「日並皇子挽歌」の論、高市皇子の霊魂を完全に幽界の存在として定位したところに、軽皇子への譲位を実現しようとする持統天皇の意志がうかがわれるとする「高市皇子挽歌」の論には斬新な切り口が現れており、いずれも優れた考察になっている。

第三章「万葉挽歌の周辺」は、死者に関わる歌にホトトギスが詠まれることに着目した論三編を置く。ホトトギスが、次代の歌のように「冥土の鳥」として詠まれるのではなく、「死者追慕」をも含む懐旧の情を喚起する季節の景物として歌われていることを指摘する。さらに挽歌の前史として、『古事記』のヤマトタケルの「大御葬歌」を取り上げ、これが〈死→もがり→はふり〉の古代喪葬の観念に基づく「再構成された物語世界」の提示であることを指摘する。いずれも丁寧な論証に裏づけられた新見に満ちた指摘であり、これまたつよい説得性をもつ。

終章「万葉挽歌の実体と課題」は、上記を総合して、死者の思いを受けとめ、それを鎮魂に転じていくところに、万葉挽歌の本質があるとまとめている。

以上のように、本論文は『万葉集』の挽歌の全体像を、歴史的な流れの中に置き、その本質を明らかにすることに成功している。亡妻挽歌など、論ずべき対象はなお残るが、本論文が今後の挽歌研究に大きく寄与することは間違いない。よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。